

豊川市教育委員会 生涯学習課発行

発掘だよりNo. 34

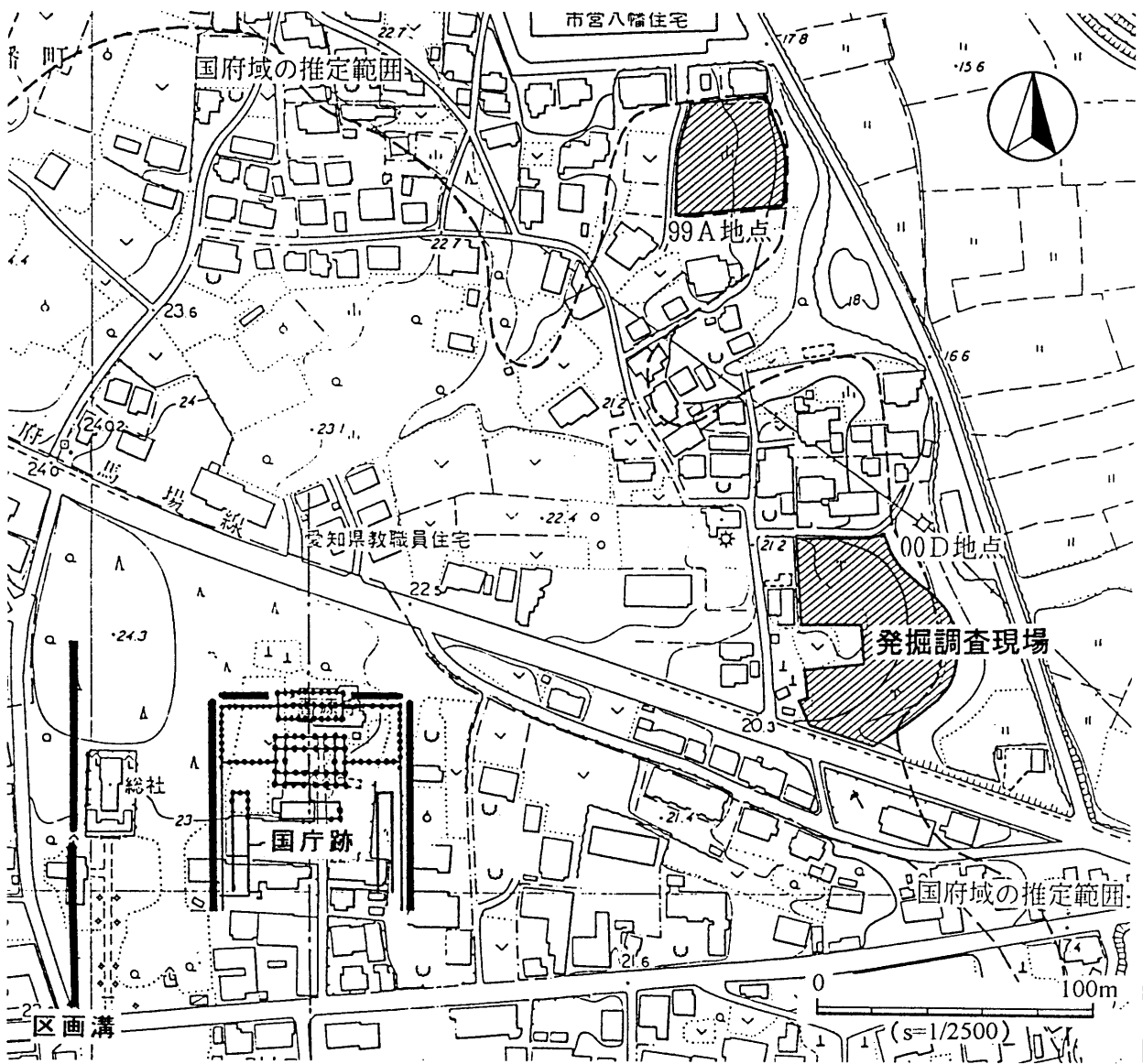
〒442-8601 豊川市諏訪1丁目1番地

平成12年11月5日(日)

TEL (0533) 89-2158 (直)

白鳥遺跡(三河国府跡) 00D地点発掘調査の概要

市教育委員会では、豊川西部土地地区画整理事業の事前調査として白鳥遺跡(三河国府跡)の発掘調査を行っています。今回の調査地点は国庁(国府の中枢部分)から東側約200mの地点で、国府域内でも東端に位置します。



今回の調査地点と国庁の位置

調査概要

- ・調査期間 平成 12 年 8 月 1 日から 11 月末までの予定
- ・調査場所 豊川市八幡町西赤土地内（豊川西部土地区画整理事業地区内）
やわたちょうにしあかつち
- ・調査主体 豊川市教育委員会（担当 生涯学習課 文化財係）
- ・調査理由 豊川西部土地区画整理事業に伴う事前調査
- ・調査面積 3, 200 m²

確認された遺構

今回調査を行った地点では、りつりょうき律令期（奈良時代～平安時代中期）から、中世、近世に至るまでの遺構が検出されています。

なかでも特徴的なものが、律令期の国府に関連する遺構群で、次に挙げたものが検出されています。

特殊遺構 1 基、ほったてぼしらたてものもと掘立柱建物跡 6 棟、たてあなじゅうきよあと竪穴住居跡 5 軒、廃棄土坑、溝、ピット等

主要な遺構については以下で述べます。

特殊遺構 S X 210

調査区の北西隅で検出された土坑状を呈する遺構で、平面形は一辺が約 6 m のほぼ正方形のかたちをしています。内部はすり鉢状に落ち込み、深さは約 2 m もあります。埋土からは 8 世紀後半を中心とした大量の須恵器類、土師器類、羊形硯、円面硯、はぐちの羽口、かま鉄製の鎌、鉄さい（鉄クズ）などが出土し、その出土状況から短期間のうちに廃棄されたものと考えられます。

たてあなじゅうきよあと竪穴住居跡 S H 208（8 世紀代）

調査区の北隅で検出されたたてあなじゅうきよあと竪穴住居跡で、一辺約 7 m の方形プランを呈します。他の住居跡と比較するとやや規模が大きく、南側に出入口施設と考えられる張り出しがあるのが特徴です。これと類似するたてあなじゅうきよあと竪穴住居跡は、この地域では昨年 99 A 地点の調査で 2 軒と国分寺北遺跡 98 C 地点の調査で 1 軒確認されており、今回で 4 例目です。通常の住居ではなく、特殊な使われ方をした住居なのでしょうか。

ほったてぼしらたてものもと掘立柱建物跡 S B 209（8 世紀代）

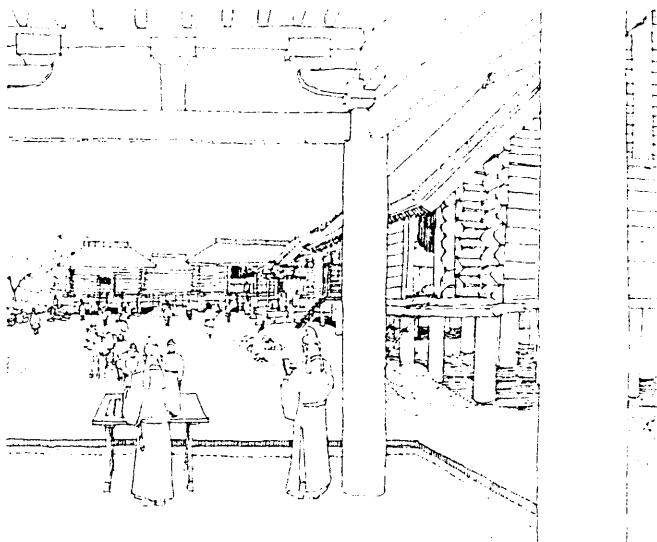
調査区中ほどで検出されたほったてぼしらたてものもと掘立柱建物跡で、規模は 5 間(9.2m) × 2 間(4.4m)と比較的大きなものです。形態・規模などから考えて、このエリアの中心的な建物になると考えられます。

ほったてぼしらたてものあと

掘立柱建物跡 S B 207・208

(8世紀代)

調査区中ほどで検出された掘立柱建物跡で、総柱の建物になります。いずれも同規模の3間×3間と考えられますが、S B 207は一部調査区外にかかってしまうため、よく分かっていません。性格としては蔵(倉)といった貯蔵施設が想定されます。



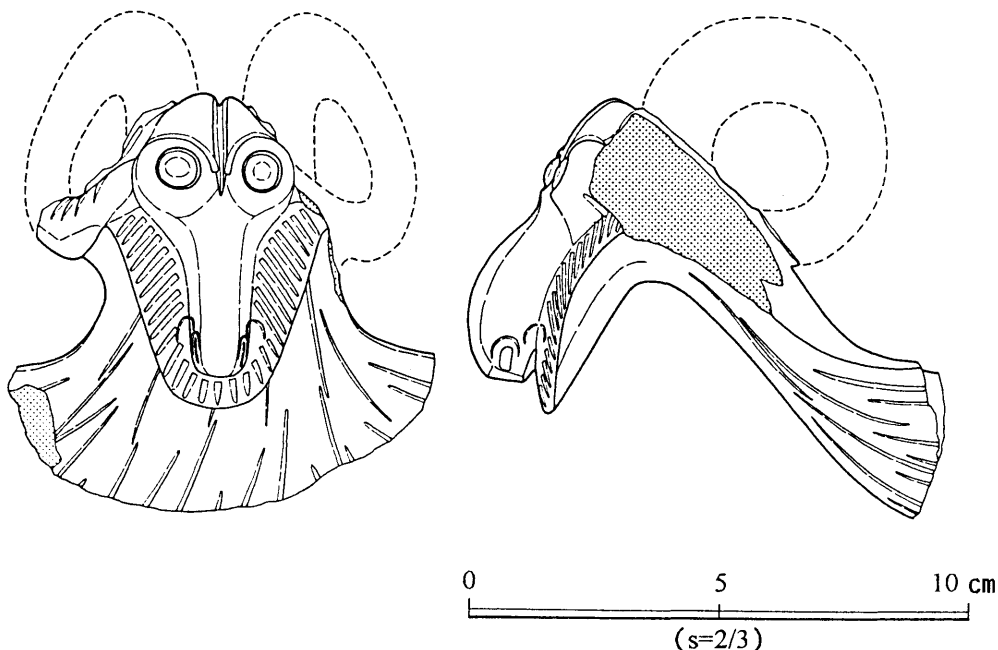
出土遺物

掘立柱倉庫の建ち並ぶ風景

今回の調査では、大型コンテナに換算して約30箱もの大量の遺物が出土しました。その遺物の大半は、特殊遺構 S X 210 から出土したものです。

この遺構から出土した遺物の大半は土器類で、8世紀後半を中心とした須恵器、土師器とそれらに混じって羊形硯、円面硯、^{ひつじがたすずり} 鞆の羽口、^{えんめんけん} 鉄製の鎌、^{ふいご} 鉄さい(鉄クズ)なども出土しています。

これらの遺物のなかで特に目を引くのは、1点だけ出土した羊形硯です。残念ながら体部(墨をする部分)を欠損していますが、遺存状態は良好で、細部の表現が緻密なのが特徴です。現在までのところ国内での出土例は奈良県の平城京跡で2点、三重県の斎宮跡で1点、岐阜県美濃加茂市で1点の4例のみで、今回が5例目となります。



特殊遺構 S X 210 出土羊形硯

律令期以外の出土遺物としては、鎌倉時代の建物跡や土坑墓などが確認されており、土坑墓からは副葬品として短刀一振と土器（山茶碗）が出土しています。

まとめ

今回の調査では3,200 m²という広い面積で調査を行ったこともあり、多くの遺構と多種多様な遺物に恵まれました。

遺構から言えることは、大型の掘立柱建物跡や特殊な堅穴住居跡の存在などから、通常の集落遺跡とは異なった、官衙的要素の強い点が挙げられます。これらの遺構が国府域内でどのような性格のエリアになるかは、不明な点が多く判然としません。可能性としては、館、庫（倉庫）といった施設が想定されます。

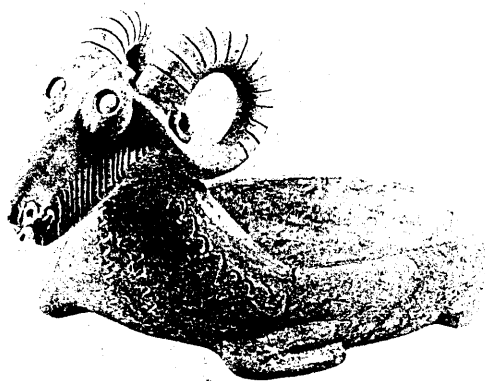
今回確認された遺構群からは1世紀ほど下った時代になりますが、「日本文徳天皇実録」857年の記載のなかに「参河国上言今月六日^{みかわのくにもしあげるにはこんげつむいかちょういんのとうこがしんどうする}庁院東庫振動」という文章がみられます。これは地震の記載と考えられるものですが、この文章から^{ちやういん}庁院（国庁院）の東側には「庫」が存在することを物語っています。

今回の調査区はまさに国庁院の東側に位置することから、今回確認された遺構群が「庫」である可能性も考えられます。

次に出土遺物についてですが、羊形硯の出土は特筆すべき点です。大陸からの影響で製作された硯と考えられますので、これを使用していた人も、中央国家と密接に関わっていた人物と推定されます。中央から派遣されてきた国司なのかもしれません。

他の出土例も製作方法が類似している点が多いことから、中央の命令で一括受注されたものが、平城京の高級貴族や、地方に赴任した国司に分け与えられた可能性も考えられます。そういったことから興味深い出土遺物と言えます。

なお、これからも国府・国分寺を中心とした発掘調査は継続して行われます。調査ごとに新たな発見があるものと思われれます。今後の調査が期待されます。



平城京跡出土羊形硯

【一口メモ】

国府とは

中央政府が、全国を統治するために設けた地方行政上の上級の区分が60余の国と島です（現在の県に相当します）。国府は、8世紀前半頃に国司として派遣された少数の貴族が、その地域を統治するための根拠地として建設された地方の役所です。

国司は管下の郡を指揮監督し、中央に報告するのが主な任務でしたが、規定上は地方行政の権限が、軍事を含めて集中しており、それを果たすために各種の下級官吏かんりが付随していました。

国府城内の施設としては、こくちやういん 国庁院、ぞうし 曹司（役所の各部署）、こくしのたち 国司館、国学の学校、倉（蔵）、兵舎、市、ようてい 宿丁や工人の宿舎などが知られます。

羊形硯について

今回出土した羊形硯は、どの種を模倣したものなのか調べてみたところ、西アジアに多く分布する「ムフロン」「ウリアル」といった種になる可能性が高いと考えられます。毛用種として現在多く見られる「メリノー」は、その地域に合ったように品種改良されたもので、祖先は前述の羊です。外見は羊というよりヤギに近く、豊かな羊毛はあまりありません。

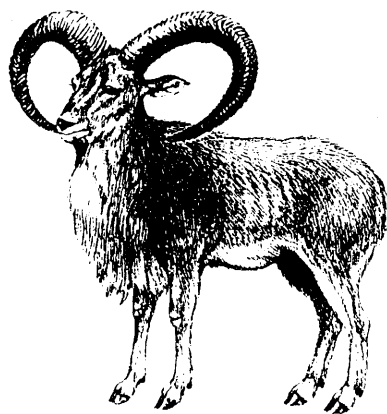
これらの羊が、シルクロードをぜい 通とうって中国（隋、唐）にもたらされたものが、朝鮮半島を経由して、当時の日本にもたらされたものと考えられます。

なお、この当時に書かれた「日本書紀」には、推古天皇の時代（7世紀初頭頃）に大陸から羊が贈られたことが記されています。

ところで、今回出土した羊形硯はどこで生産されたものなのでしょう。先に出土している平城京の2例、斎宮の1例と比較すると類似点が多く、同じ工房で生産されたものか、もしくは一つの羊形硯を模倣して一箇所すえ で生産された可能性が考えられます。胎土などから国内で焼かれた須恵質のものですが、伴出遺物がさなげよう 猿投窯産のものが大多数であることを考えると、猿投窯産のものである可能性が考えられます。



ムフロン



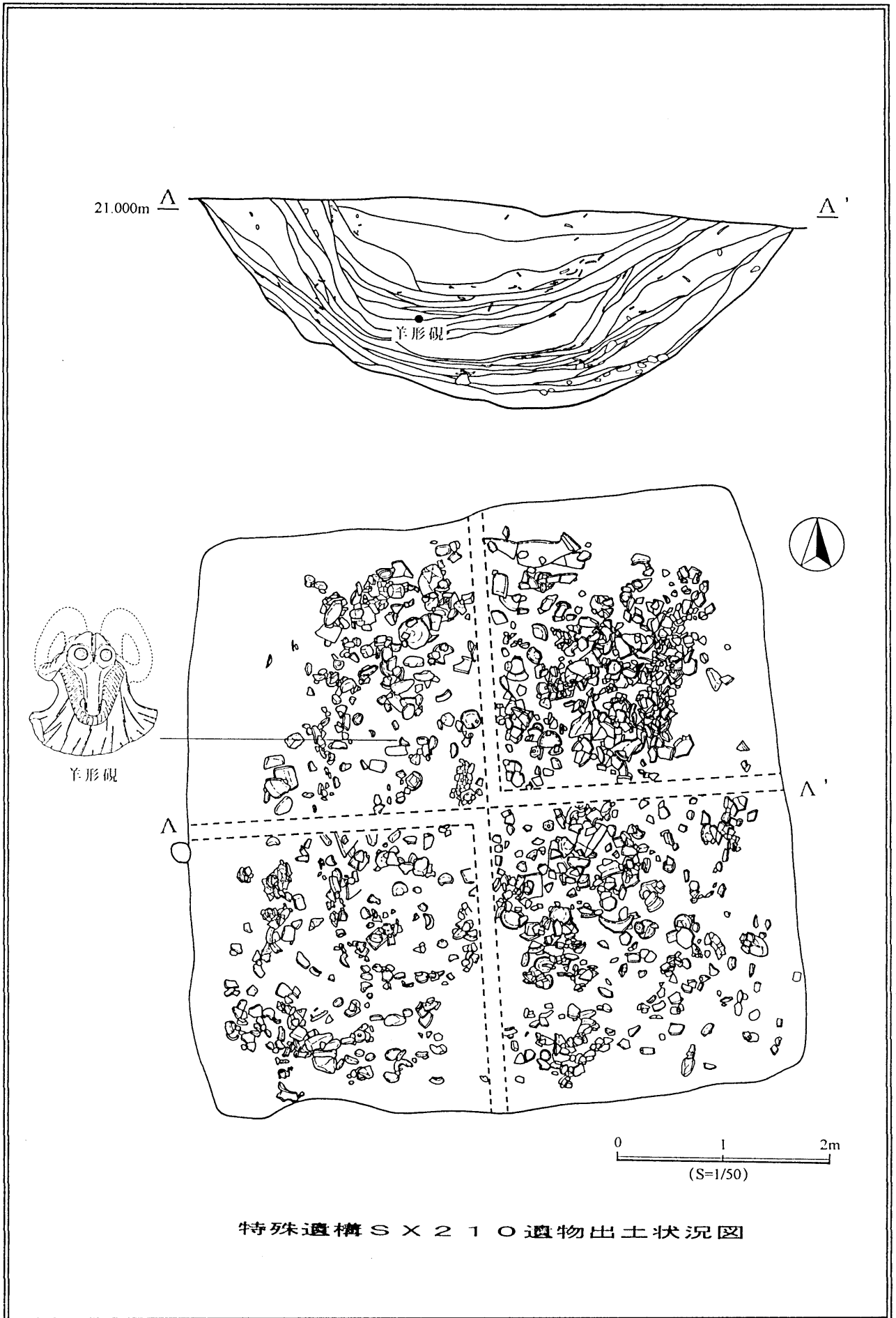
ウリアル

Y-15750

Y-15800

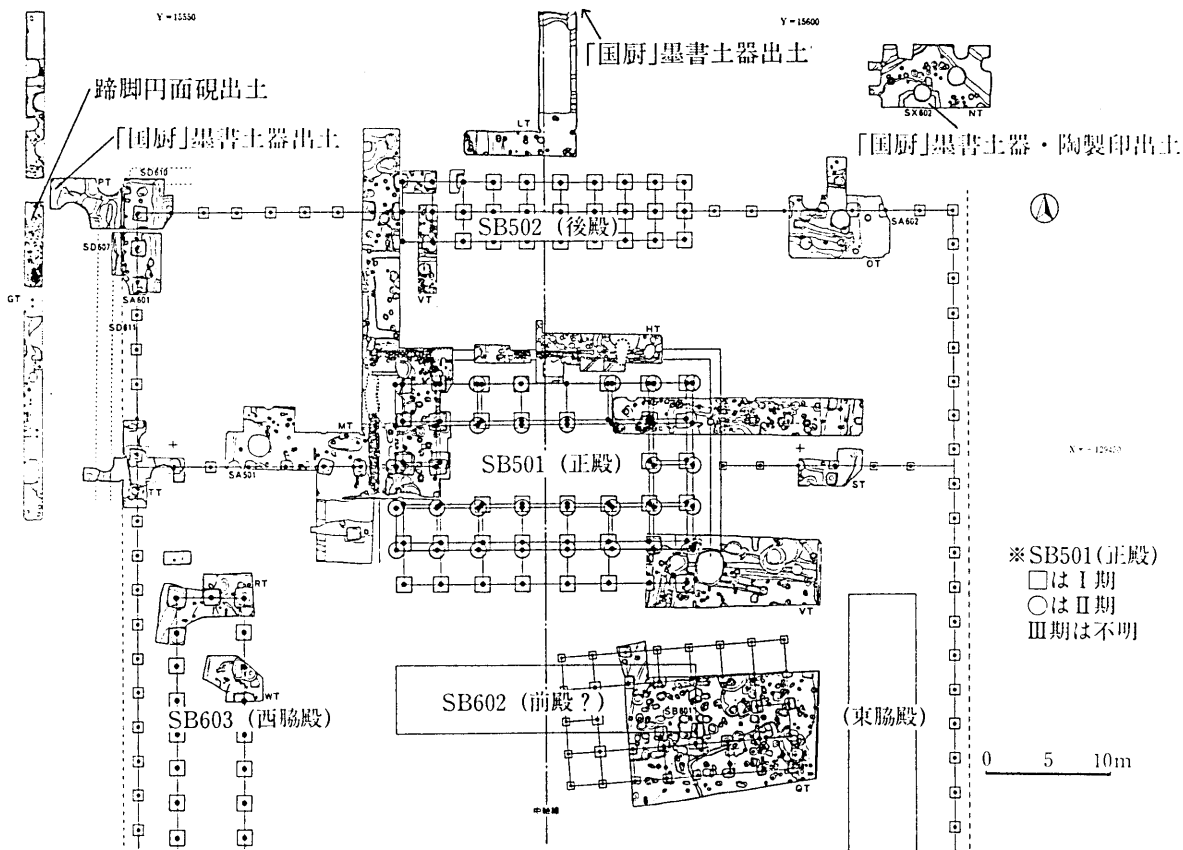


白鳥遺跡（三河国府跡）O O D地点遺構平面図

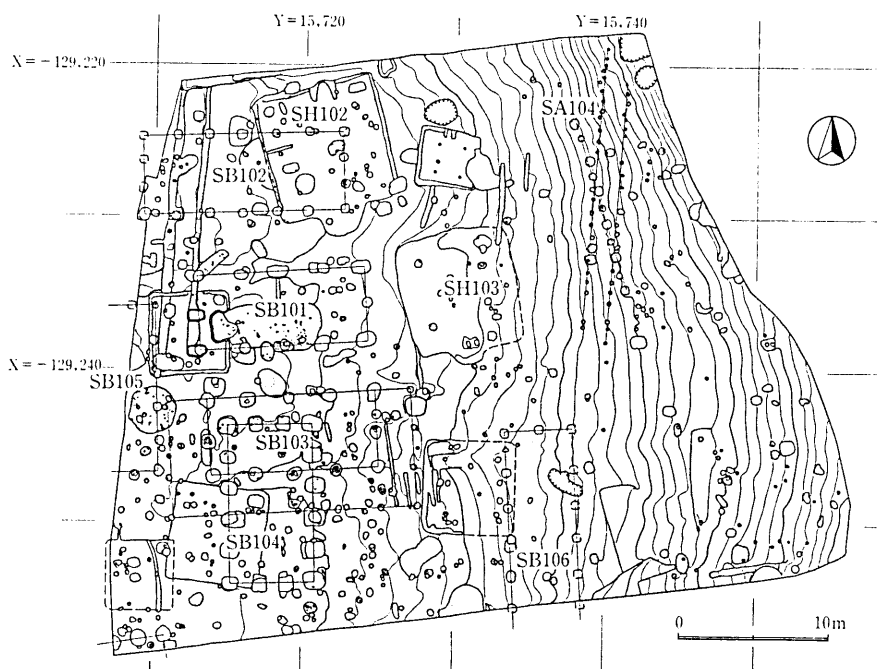


特殊遺構 S X 2 1 0 遺物出土狀況圖

【参考】



国庁跡遺構平面図 (平成7. 8. 9年度調査)



99 A地点調査区平面図 (国司館推定遺構、平成11年度調査)